

生田緑地における植栽樹を食草とするコブガ科 Nolidae の記録

横田光邦*・宮内隆夫*・佐野悦子*・成田和子*・三田村瞬*

Records of Nolidae eating planting trees in Ikuta Ryokuchi Park, Kawasaki City.

Mitsukuni Yokota*, Takao Miyauchi*, Etsuko Sano*, Kazuko Narita* and Shun Mitamura*

はじめに

生田緑地には各種樹木が植栽されているため、それらを利用している蛾類も確認されている。コブガ科 Nolidae のうち、これら植栽樹を幼虫期の食餌食物として利用が確認された種について紹介する。

採集記録

(1) イナズマコブガ *Meganola triangularis* (Leech, [1889])

[多摩区]2exs(亜終齢幼虫), 多摩区枳形, 17-IV-2022, 横田光邦採集・飼育, 1ex(終齢幼虫), 多摩区枳形, 11-IX-2022, 横田光邦確認, 1ex(中齢幼虫), 多摩区枳形, 11-XII-2022, 横田光邦確認

亜終齢幼虫 2 個体を 4 月 17 日に中央広場に植栽されているスダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba subsp. *sieboldii* の 1.5m 程の高さの固い葉の裏より採集した(図 1)。スダジイにて飼育したところ、4 月 20 日と 21 日に相次いで終齢となり(図 2)、その色彩はドクガ幼虫に擬態しているようである。最初に終齢となった個体は 4 月 25 日に繭となり(図 3)、もう 1 頭はヒメバチの 1 種と考えられる寄生蜂に寄生されていて、繭より脱出した。繭の中央付近には、亜終齢まで付けていた頭部の殻を付着させている。その後、5 月 15 日に成虫が羽化した(図 4)。同年 9 月 11 日、同地で終齢幼虫 1 個体を発見、さらに 12 月 11 日に同地で中齢幼虫を発見した



図 1. イナズマコブガ *Meganola triangularis* (Leech, [1889]) 亜終齢幼虫



図 2. イナズマコブガ *Meganola triangularis* (Leech, [1889]) 終齢幼虫



図 3. イナズマコブガ *Meganola triangularis* (Leech, [1889]) 繭



図 4. イナズマコブガ *Meganola triangularis* (Leech, [1889]) 成虫

ことから、年 3 化しているものと考えられ、越冬は幼虫であろう。神奈川県内では、横須賀市で記録がある(中島ほか, 2018)。以前は伊豆半島以西に生息していたが(岸田, 2011)、分布が北上しているようである。

(2) ツクシアオリンガ *Hylophilodes tsukusensis* Nagano, 1918

[多摩区]1ex(亜終齢幼虫), 多摩区枳形, 3-XI-2022, 横田光邦採集・飼育, 1ex, 多摩区枳形, 6-XI-2022, 三田村瞬確認

*特定非営利活動法人 かわさき自然調査団

Kawasaki Organization for Nature Research and Conservation

中央広場に植栽されているマテバシイ *Lithocarpus edulis* (Makino) Nakai の、2m 程の高さのところの固い葉を食べている亜終齢幼虫を発見し採集した(図 5)。マテバシイにて飼育したところ、11 月 18 日に終齢、12 月 1 日に繭(図 6)となり、このまま越冬するのかもしれない。また、11 月 6 日には西口トイレで成虫を撮影した(図 7)。神奈川県内では、三浦半島の横須賀市や三浦市での記録がある(中島ほか, 2018)。生田緑地でも 2017 年に成虫の記録がある(宮内ほか, 2020)。マテバシイの植栽により分布が拡大しているようで(岸田, 2011)、ムラサキツバメ *Narathura bazalus* (Hewitson, 1862) と分布拡大の傾向が似ている。



図 5. ツクシアオリング *Hylophilodes tsukusensis* Nagano, 1918 亜終齢幼虫



図 6. ツクシアオリング *Hylophilodes tsukusensis* Nagano, 1918 繭



図 7. ツクシアオリング *Hylophilodes tsukusensis* Nagano, 1918 成虫

(3) マエシロモンキノカワガ *Nycteola costalis* Sugi, 1959

[多摩区]2exs(終齢幼虫), 多摩区枳形, 11-IX-2022, 横田光邦採集・飼育

中央広場に植栽されているマテバシイのひこばえの新芽を糸で綴っている終齢幼虫 2 個体を 9 月 11 日に採集した(図 8)。飼育したところ、9 月 13 日に繭となり、9 月 28 日にいずれも羽化した(図 9)。主に常緑照葉樹林に生息しているようであるが(岸田, 2011)、幼虫は常緑のカシ類だけでなく、落葉のコナラ属 *Quercus* からのも得られている(中島ほか, 2004)。いずれにしても新芽の時期にあわせて幼虫が発生しているようである。神奈川県内では、川崎・横浜・県央東部・丹沢などで記録があり(中島ほか, 2004)、川崎市では麻生区柿生での記録がある(中島ほか, 2018)。



図 8. マエシロモンキノカワガ *Nycteola costalis* Sugi, 1959 終齢幼虫



図 9. マエシロモンキノカワガ *Nycteola costalis* Sugi, 1959 成虫

(4) トビイロリング *Siglophora ferreilutea* Hampson, 1895

[多摩区]1ex(中齢幼虫), 多摩区枳形, 12-XII-2021, 横田光邦採集・飼育, 1ex(繭), 多摩区枳形, 17-IV-2022, 横田光邦確認, 8exs(中齢幼虫), 多摩区枳形, 11-XII-2022, 横田光邦確認

七草峠園路のクスノキの辻側にある植栽のスダジイのひこばえ葉裏より、中齢幼虫を12月12日に採集した(図10)。葉を切り抜くような典型的な食痕を作り、葉裏には糸を荒く吐いて足場を作る特徴がある(駒井ほか, 2011)。スダジイにて飼育したところ、冬場でも少しずつ餌を食べながら2回脱皮して、翌年3月10日頃に終齢となった。その後、4月2日に繭となり、4月25日に羽化した(図11)。野外での越冬幼虫を探したところ、4月17日に中央広場にあるスダジイにて繭(寄生蜂の脱出痕あり)を発見した(図12)が、幼虫は発見できなかった。繭を見つけた中央広場にて12月11日に再度幼虫探索を行ったところ、スダジイより8頭の幼虫を確認でき、本種は幼虫(中齢)越冬であることは間違いないと考える。



図10. トビイロリンガ *Siglophora ferreilutea* Hampson, 1895 中齢幼虫と食痕



図11. トビイロリンガ *Siglophora ferreilutea* Hampson, 1895 成虫



図12. トビイロリンガ *Siglophora ferreilutea* Hampson, 1895 繭

生田緑地での成虫記録は、収蔵標本を調査した結果、2011年(佐野ほか, 2013)から継続して採集されており、5月・9月・11月に採集されている。夏世代の幼虫はクヌギ *Quercus acutissima* Carruth. (1862) やコナラ *Q. serrata* Murray (1784) などの落葉性ブナ科樹木も食べるが(筆者確認、未発表)、越冬世代は常緑ブナ科から見出されることは興味深い。神奈川県内では、県央西部・津久井(中島ほか, 2004)のほか、川崎・横浜・三浦半島(中島ほか, 2018)など広域で記録されており、暖地の平地や低山地に多い(岸田, 2011)。

(5) ナンキンキノカワガ *Gadirtha impingens* Walker, [1858]

[多摩区]1♀, 多摩区枳形, 13-X-2022, 宮内隆夫採集, 1♀, 多摩区枳形, 27-X-2022, 成田和子採集, 2exs(終齢幼虫), 27-X-2022, 佐野悦子採集・宮内隆夫飼育, 1ex(繭), 3-XI-2022, 宮内隆夫確認, 2exs(中齢幼虫), 3-XI-2022, 横田光邦確認, 1ex(終齢幼虫), 10-XI-2022, 三田村瞬確認, 5exs(繭), 11-XII-2022, 三田村瞬確認

科学館外壁にて2022年10月に成虫2個体が相次いで採集され、その後科学館前に植栽されたナンキンハゼ *Triadica sebifera* (L.) Small より終齢幼虫が見つかった(図13)。科学館入口には既に羽化したと思われる繭も見つかっており(図14)、この植栽樹で発生したと考えられる。また、12月にはSL脇の花壇の中のウツギの一種(未同定)の低木の枝に、5個の繭を発見した。20mほど離れた中央広場にナンキンハゼが植栽されており、そこから移動してきたと考えられる。10月27日に採集した幼虫1頭をナンキンハゼで飼育したところ、11月5日に蛹化(造繭に失敗)、11月27日に♀が羽化した(図15)。野外ではこの世代で成虫越冬するものと考えられる(駒井ほか, 2011)。生田緑地でのナンキンキノカワガの記録を収蔵標本より調査した結果、2021年以前は皆無であった(未発表)。神奈川県内では、県央西部・津久井・丹沢・足柄(中島ほか, 2004)のほか、県央東部の相模原市(中島ほか, 2018)でも記録があり、筆者は横浜市西部の泉区でも幼虫を確認している(未発表)。自然状態ではシラキ *Neoshirakia japonica* (Siebold



図 13. ナンキンキノカワガ *Gadirtha impingens* Walker, [1858] 終齢幼虫



図 14. ナンキンキノカワガ *Gadirtha impingens* Walker, [1858] 繭



図 15. ナンキンキノカワガ *Gadirtha impingens* Walker, [1858] 成虫

et Zucc.) Esser を利用している(岸田, 2011)ので、その分布と同じく本種も東北地方まで記録がある。

おわりに

コブガ科は、ヤガ科のリング亜科・キノ

カワガ亜科を合体して一つの科とされた(岸田, 2011)。幼虫は毛虫タイプからイモムシタイプまで様々であり、コブガ亜科の一部の種の幼虫では脱皮殻の頭部を積み上げていく習性がある。いずれの種もボート型の繭を作る特徴があり、ナンキンキノカワガなどでは蛹が繭を擦ることで発音する(駒井ほか, 2011)。今回取り上げた5種は、植栽樹を利用することと温暖化が相まって、分布を北進・拡大させていると考えられる種である。コブガ科に限らず他科でも同様のことが見られるため、今後も成虫採集のみならず幼虫探索も継続して行っていく必要がある。

謝辞

川崎市青少年科学館の高中健一郎氏には、本稿作成に当たってご助言頂いた。ここに感謝の意を表す。

引用文献

- 岸田泰則 (編), 2011. 日本産蛾類標準図鑑 II. pp. 170-189. 学研教育出版, 東京.
- 駒井古実・吉安 裕・那須義次・斉藤寿久 (編), 2011. 日本の鱗翅類—系統と多様性. pp. 883-884. 東海大学出版会, 秦野.
- 宮内隆夫・佐野悦子・成田和子・横田光邦・蛾類研究グループ, 2020. 川崎市北西部の蛾類の記録(2015年～2018年)－1990年からの継続調査－. 川崎市青少年科学館紀要 (30):73-120.
- 中島秀雄・山本光人, 2004. チョウ目 (ガ類). 神奈川県昆虫誌 III, p.1112-1115. 神奈川県昆虫談話会, 小田原.
- 中島秀雄・阪本優介, 2018. チョウ目 (ガ類). 神奈川県昆虫誌 2018 III, p.788-790. 神奈川県昆虫談話会, 小田原.
- 佐野悦子・野澤興一・蛾類研究グループ, 2013. 生田緑地周辺の川崎市産蛾類目録(2007年～2012年)－1990年からの継続調査－. 川崎市青少年科学館紀要 (24):19-29.